

鹿児島生協病院と地域をつなぐ広報誌、レインボー。

Issue
35

rainbow



医師が見つめる、鹿児島生協病院眼科の“現在と未来”

医師が見つめる、鹿児島生協病院眼科の“現在と未来”

今回のrainbowは誌面をリニューアルし、もっと鹿児島生協病院を身近に感じていただけたらと、医師へのインタビューを通して想いを訊いてみました。今回の特集は眼科です。ここ最近の当眼科でもリニューアルしたことがいくつかありますので、ぜひ誌面を覗いてみてほしいです！「先生、生協病院眼科の“現在と未来”、どんな景色が広がっていますか？」

患者さんの不安な気持ちを取り除いて “明るい未来が見える”力になれば。

福留みのり 眼科部長 インタビュー

____rainbow35リニューアル号初回のインタビューは、福留みのり先生にお願いしました。今年から眼科部長に就任されての想いも交えてお話を伺いできたらと思います。まずは先生ご自身のご紹介をお願いします。

福留 鹿児島生まれ鹿児島育ちで、鹿児島大学医学部を卒業し、2002年鹿児島生協病院に入職しました。2年間の研修医時代を経て、熊本県の研修病院に行き、眼科医になるための専門研修をしました。その6年後に鹿児島生協病院に戻り、専門医の資格を取り、現在に至ります。

____なぜ眼科医になろうと思いましたか？
福留 学生時代に鹿児島生協病院の病院実習に参加した時に、女性の眼科医の先生に出会って、素敵だなと憧れたことが一番大きいです。

____憧れの先生の存在は大きいですね。
福留 あとは、働き方が自分の理想に合っていたからかな。熊本に研修に行くと同時に結婚し、今は3児の母として医師と両立しながら働いています。とはいっても、それなりに忙しい毎日を過ごしています。

____働きやすい環境なんですね。それでも、お子さん3人いっちゃって、外来診療だけでなく入院手術もされていて、本当にすごいなと思います。

____日々の診療で一番心がけていることはなんですか？

福留 患者さんの話をしっかり聞いて、不安を取り除いてあげることです。患者さんは心配で不安な気持ちで受診しているので、優しく声掛けしながら診察して、わかりやすく説明することを心がけています。

____患者さんが何を心配して受診されているのか傾聴することが大事なんですね。急に見えにくくなったり、視界が狭くなって

きたりしたら、ものすごく不安になりますよね。

福留 それだけ眼が生活にとって大事な体の一部なんだと思います。それに、色々な検査の数値からどのように見えているのか、ある程度の推測はできても、実際にその眼で見ているのは患者さんなので、一番患者さんが“見え方”についてわかっていると思います。患者さんの言葉は私たち医療者にとって重要な情報であり、しっかり話を聞くことはより良い医療にもつながると思うんです。

____患者さんからしたら、眼の不安を共有してほしいでしょうし、生活に直結するからこそ、きつとすぐような気持ちの方もいらっしゃると思います。特に手術が必要な方は、不安でいっぱいのはずです。

福留 その中で、患者さんが安心して笑顔で帰る姿を見ると、やりがいを感じます。それこそ、白内障手術をして、入院する時はとても不安な様子だった方が、退院の時にとても喜んでる様子を見て、本当に良かったとやりがいを感じます。

____患者さんの安心した笑顔が見れるのは、医師にとってうれしい限りですね。

____笑顔といえば、福留先生の笑顔がとても素敵だと評判です！よく外来でにこやかな雰囲気です。診察されているので、きっと患者さんも気軽に話しやすいでしょうし、先生の人柄もあいまって眼科全体の雰囲気もいいなと感じました。スタッフからも、“みのり先生”って呼ばれて親しまれていますよね。

福留 いえいえ（照笑）。もちろん病院なので、患者さんの不安に寄り添う真剣な場面の連続ですが、治療が一段落してよく見えるようになって喜ばれたり、ずっと通院されている患者さんの日常生活の話の中に

*撮影にあたり職員がマスクを外していますが、病院内では診療中をはじめ、原則マスクを着用しています。



理念に沿った一人ひとりに寄り添う医療、 総合病院ならではの他診療科との連携が強みです。

微笑ましい話があったりして、笑顔になる場面も多々ありますね。それに、当院の眼科では看護師、視能訓練士など多職種が関わっていて、どのスタッフの対応もとても丁寧です。雰囲気作りというよりは、優しい声掛けやプライバシーの保護、検査の説明など、様々な場面でスタッフがきめ細やかな対応をしてくれているおかげだと思えます。

____多職種協働でチーム医療を実践しているんですね。



____さて、福留先生は今年度から眼科部長に就任されました。改めて鹿児島生協病院眼科の“現在”を訊いてみたいと思います。どのような特徴がありますか？

福留 当院では、〈人権を尊重し、安全で信頼される医療を地域の人々とともにすすめます〉という理念のもと、日々の医療にあたっています。福宿先生が中心となって取り組んでいる、視力や視野が不良な患者を対象とした〈ロービジョンケア〉や、日常生活の細やかな聞き取りから得られた困りごとに応じて、社会福祉制度の案内などもしています。

____病院の理念に沿って一人ひとりに寄り添った医療を提供しているんですね。それに、〈ロービジョンケア〉は初めて知りました。あとで福宿先生に、どんな取り組みなのか訊いてみます。

福留 それと、理念にある〈安全で信頼される医療〉に関わることとして、昨年頃から最新の検査機器を複数導入して、検査の充実にも力を入れています。眼疾患の微細な変化や状況を捉える精度の向上とともに、鮮明な画像によって以前より説明もわかりやすくなっていると思います。

左から福宿宏英医師、福留みのり医師、山藤香子医師。日々診療の合間でも相談やコミュニケーションをとっているというだけあって、とても仲睦まじい様子。福宿医師と山藤医師の記事はP.5・6に掲載。

____〈地域における総合病院〉の眼科ならではの特徴はどんなところでしょうか？

福留 他診療科と連携して、複数の専門性が必要な疾患を迅速に治療できるのは総合病院ならではの強みだと思います。糖尿病患者や透析患者など、全身疾患に起因する眼疾患をもつ方もたくさんいらっしゃいます。例えば、視力低下で受診され、まだ50歳代なのに進行した白内障を認めた患者さんがいて、詳しく聞いたら10数年健診を受けていない主婦の方だったので、糖尿病からの白内障を疑い採血したら糖尿病が見つかったという経験もあります。その方は白内障の手術もしないといけなくて、内科医と連携してすぐに入院して血糖コントロールをしていただき、早めに白内障手術に漕ぎ着けることができました。

____他診療科との連携がスムーズな分、すぐに手術につながるのは大きいですね。

福留 内科疾患の診察や糖尿病の血糖コントロールなどをお願いすることもあり、その際もコンサルテーションしやすく、白内障手術の際の全身チェックや全身麻酔下での手術も、麻酔科医がいるのでかなり心強いです。



ふくどめ・みのり 鹿児島生協病院眼科部長。日本眼科学会専門医。鹿児島県生まれ。鹿児島大学卒。2002年鹿児島生協病院入職。熊本県で専門医研修を経て、2010年より鹿児島生協病院眼科医として勤務。2025年より現職。

待合の様子。壁紙をスカイプブルーに貼り替え。青と白を基調とし、窓から差し込む光によって穏やかな雰囲気を感じられる。

____患者さんにとって安心して入院手術が受けられる環境なんですね。また山藤先生にもお話を訊いてみます。他診療科の先生からすると、病院内に眼科の先生がいるのはまた心強いのではないのでしょうか？

福留 糖尿病患者や透析患者のほか、加齢に伴う症状も多いので、他診療科からの眼疾患のコンサルテーションも多々あります。また、ありがたいことに地域の病院や開業医の他診療科の先生方からもご紹介をいただくこともあり、随時対応させていた

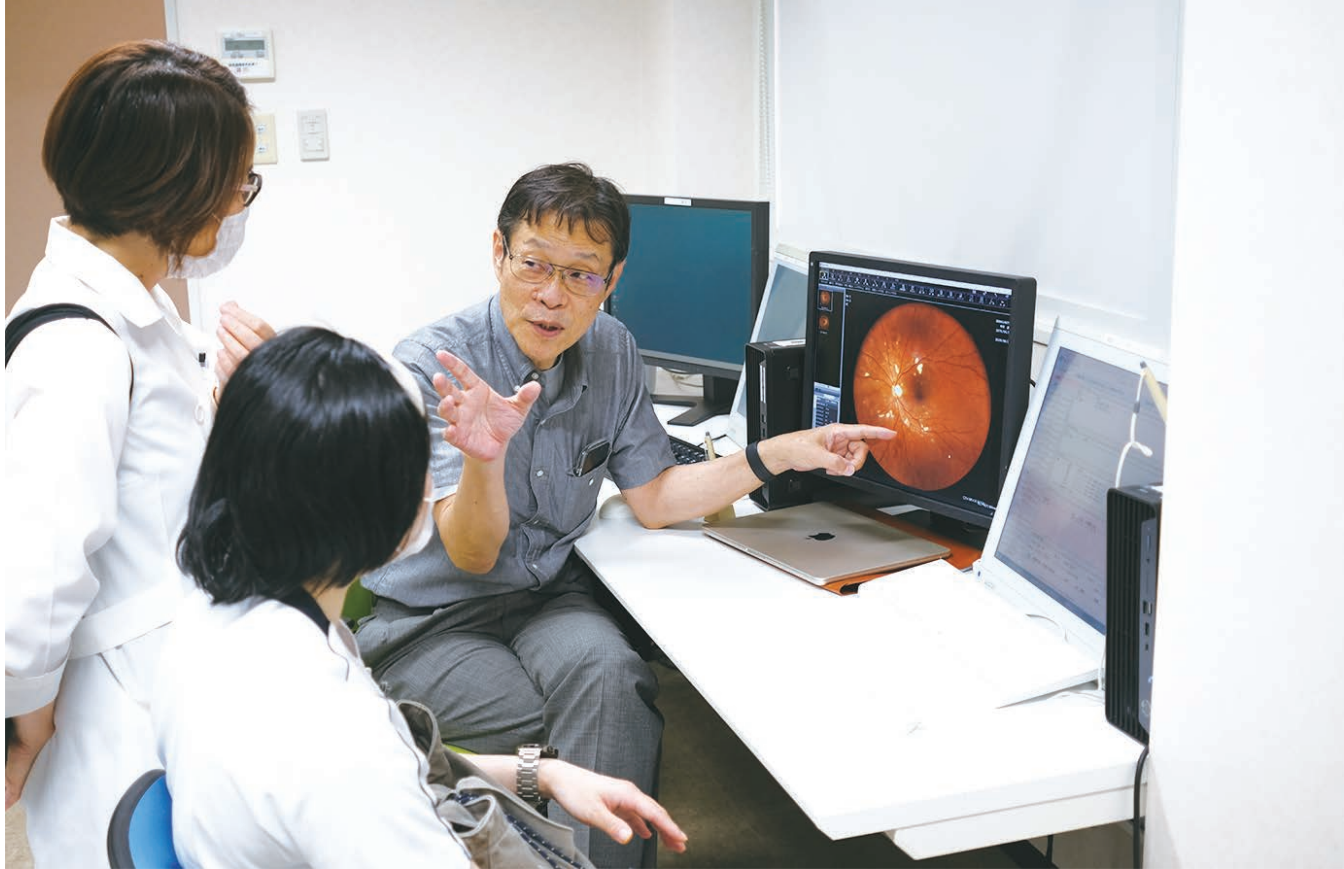
だいています。

____地域の中で果たす役割の大きさが伺えますね。色々とお話を訊かせていただきましたが、最後に、福留先生ご自身のこれからの地域医療への想いも含め、鹿児島生協病院眼科の“未来”をお訊きしたいです。

福留 鹿児島生協病院の規模の眼科では、日々患者さんとしっかり向き合うことができて患者さんとの距離が近く、自分がやりたい理想の診療ができるので、とてもやりがいを感じることができています。さっき

の笑顔の話じゃないですけど、病院だからって不安で暗くなりがちかもしれないですが、やっぱり患者さんには元気になってもらいたい。元気になって、“明るい未来が見える”お手伝いができたらいいなと思います。そんな鹿児島生協病院眼科であり続けたいです。

____“明るい未来が見える”まさに眼科ならではのですね！



知られざる？〈ロービジョンケア〉の取り組み

文 福宿宏英 医師

ふくやど・こうえい 鹿児島生協病院眼科医。日本眼科学会専門医。鹿児島県生まれ。鹿児島大学卒。1985年徳島大学医学部付属病院を経て、1991年より現職。

近年の眼科医療の進歩により、視機能を回復あるいは維持できる疾患もありますが、一方で疾患の種類や進行程度により回復が難しいこともあれば、確立された治療法がなく進行性の疾患もあります。視覚に障害をきたし、日常生活や社会活動に支障があり困難を感じている人に対する支援を行うことを〈ロービジョンケア〉と言います。まだまだ社会に浸透していないケアですが、医療的なケアから教育的、職業的、社会的、福祉的、心理的ケアまで、その範囲は多岐にわたります。

当科では2015年度から〈ロービジョンケア〉に取り組み、毎週火曜午後に専門外来を設けています。医療的ケアでは、よりよく見えるために様々な拡大鏡（ルーペ）、拡大読書機、iPadなどのタブレット端末、遮光眼鏡を実際に使い体験してもらいます。様々な色の遮光眼鏡のサンプルがあり、診察室内や病院の外で体験してもらいます。また、視覚以外の感覚を活用することも提案します。例えば、音声を利用するもの（時計、体温計、血圧計、調理器具など）や、触覚を利用するものがあります。社会的および福祉的ケアでは、視力や視野などで視機能を評価し、身体障害者手帳や障害年金の申請をサポートします。身体障害者手帳

取得後には福祉サービスを案内します。

当科で行ったオリジナル〈ロービジョンケア〉をいくつかご紹介します。プロジェクターを使った夜間の運転の疑似体験によって、見やすい眼鏡レンズのカラー選択につながりました。

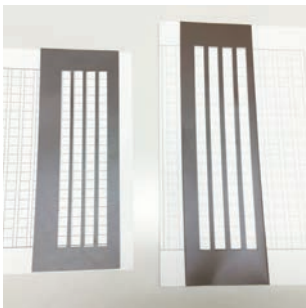
文章を書きやすいように、400字詰め原稿用紙用のタイポスコープを自作し提供しました。タイポスコープとは、読書や筆記を補助する道具で、黒い紙などで窓を設け、読みたい部分を強調したり、文字を揃えて書いたりするのに使います。眩しさを軽減する効果もあり、市販品ではハガキ、封筒宛名書用、投票用紙記名用があります。

そのほか、視力と視野に障害のある入院患者さんの「白いシーツの上に置いたマスクが見つけない」という困りごとに対し、マスクに黒いテープを貼ることを提案しました。

私たちは〈鹿児島ロービジョンフォーラム〉という団体の事務局も担っています。これは視覚障害者支援に携わる医療従事者・教育関係者・福祉関係者を会員として、勉強会や情報交換を行ったり、必要としている方々が〈ロービジョンケア〉につながるためのリーフレットを制作する活動を行っています。



様々な拡大鏡（ルーペ）



自作のタイポスコープ



〈鹿児島ロービジョンフォーラム〉案内



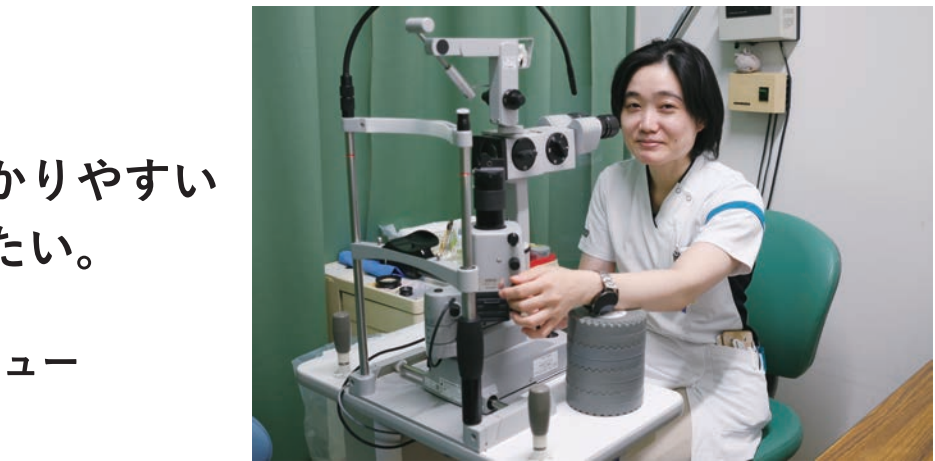
入院手術も外来もかかりやすい身近な眼科医でありたい。

山藤香子 医師 インタビュー

——山藤先生が眼科医として当院に勤務されて2年が経ちました。ご出身は県外と伺いましたが、鹿児島での生活はいかがですか？

山藤 出身は広島県ですが、祖母が鹿児島に住んでいることもあって大学から鹿児島で、卒業後も鹿児島生協病院で初期研修をして、外部研修もずっと鹿児島の病院でお世話になったので……気づいたらそのまま居ついていますね(笑)。ごはんがおいしくて、人も温かくてとても気に入っています。福留先生と福宿先生にはカンファレンスはもちろん、日々の診療でも色々と相談できるので、ありがたい環境で働いています。——まさに第二の故郷ですね。眼科医に進んだきっかけを伺いたいです。

山藤 人体の中でも眼は特殊な臓器で、人間は外界の情報の約8割を眼から得ていて、〈第Ⅱ脳神経〉として重要な臓器でもありながら、外から診ることができるという特徴に興味を持ちました。また、大学5年生の時に参加した〈眼科サマーキャンプ〉のウェットラボで白内障手術を経験し、顕



微鏡手術に興味湧いて、外科的治療から内科的治療までできるところも魅力に感じ眼科医を目指しました。

——それこそ山藤先生は“現在”、福留先生と白内障手術を担当されていますが、当院での手術はどのような特徴がありますか？

山藤 白内障手術を入院手術で行っていることが特徴だと思います。日帰り手術の場合だと、術後頻回に受診に出向かないといけませんが、入院手術の場合は入院中に診察できるので、特に高齢の患者さんで入院手術をご希望されて当院を受診される方もいらっしゃいます。——患者さんにとって、入院中すぐに術後の経過を診てもらえるのも安心ですね。手術件数はどのくらいですか？

山藤 年間で約330件です。他にも福宿先生が翼状片の手術をされています。——先生は学生時代から興味を持っていた分野だけに、やりがいも大きいですね。**山藤** そうですね。白内障手術で視力が改

善した患者さんが「よく見えるようになった！」と笑顔で報告してくださるのが一番のやりがいですね。患者さんが色々なお話をしてくださるので、日々の外来自体もやりがいになっています。

——患者さんの笑顔は何よりですね。先生の考える“未来”、目指す眼科医像をお伺いしたいです。

山藤 眼疾患は加齢に伴うものも多いですが、近年のデジタル化やスマホの普及で若年層の眼疾患も以前より増えており、今後ともこれまで以上に眼科の需要は高まると思います。だからこそ若老若男女問わず気軽にかけやすい、話しやすい雰囲気的眼科医でありたいと思います。

さんとう・きょうこ 鹿児島生協病院眼科医。日本眼科学会専門医。広島県生まれ。鹿児島大学卒。2015年鹿児島生協病院入職。鹿児島大学病院、今村総合病院、鹿児島市立病院での専門研修を経て、2023年10月より現職。

眼疾患の早期治療につながる検査の充実へ。

文 谷口莉子 視能訓練士

たにぐち・りこ 鹿児島生協病院眼科検査部。視能訓練士。宮崎県生まれ。2020年鹿児島生協病院入職。家族の影響で視能訓練士に魅力を感じ、現職に至る。



眼科検査部では現在、眼疾患の早期治療につながるよう、2つの取り組みに力を入れています。

1つ目は、2024年に新たに更新した2つの検査機器による高精度の検査です。

ハンフリー視野計〈HFAIII840〉

主に緑内障の診断、経過観察に使用し、自覚症状のない初期の小さい異常を調べることができます。網膜疾患・脳血管障害の視野異常の検出、視野異常の早期発見に有効で、従来よりも早く精度の高い検査を実現しました。視覚障害者の認定に関する機能や、視野欠損をイメージ画像に抽出することで、ご家族にも客観的に分かりやすく伝えることができる機能も備えています。

眼底カメラ〈EIDON FA〉

高解像度画像と広角イメージングを融合した撮影システムで高精細高解像な眼底画

像が撮影可能です。撮影時に眼瞼が機器に接触せず、レーザー光源での連続照明がないため、患者さんへの負担が少ないという特徴があります。

2つ目は、近年のデジタル化の影響で増えている小児の弱視に対する検査です。

約8歳までの感受性期に屈折異常や斜視などで発達が妨げられると、弱視となってしまうため、感受性期内に視覚異常を早期発見し、早期治療をすることが非常に重要です。当院で採用している〈スポットビジョンスクリーナー〉は、遠視・近視・乱視などの屈折異常や斜視を他覚的にスクリーニングし、小児の客観的視覚評価を行うことができる機器です。その他にもドットカード・絵指標などを用いた検査、治療用眼鏡、遮蔽訓練を通じて、様々な小児の検査や弱視治療に取り組んでいます。

眼科外来診療のご案内

●2025年12月時点のご案内です●*は要予約です●() 内の数字は週数を表しています●午前の初診受付は11:30までです●学会出張などの関係で医師体制が変更になる場合がございます●月ごとに医師体制が変わります。最新の医師体制はお電話かホームページでご確認ください

	月	火	水	木	金	土
午前	福留	福宿	*福宿	福宿	福宿	福宿(3・4)
8:30 - 12:00			福留	*福留		福留(1・2・4)
	山藤	山藤	山藤	山藤	福留	山藤(1・2・3)
午後	福留	*福宿		福宿	*福宿	
13:45 - 16:30	山藤			(16:00まで)	*山藤	
	(16:00まで)					



総合病院 鹿児島生協病院

●組合員の出資・運営・利用により経営されている鹿児島医療生活協同組合の中心的病院です●鹿児島市の谷山地域に位置し、鹿児島市南部はもとより、広く南薩方面の地域医療を担っています

理念〈人権を尊重し、安全で信頼される医療を地域の人々とともにすすめます〉



●病床数299床 | HCU 8床 / 急性期一般病棟211床 / 回復期リハビリ病棟40床 / 地域包括ケア病棟40床

●診療標榜科は20科、救急指定医療機関として夜間や日曜日・祝日も24時間体制を取り、救急車搬入件数は年間2,000件を超えます。

●すべての人々が安心して医療を受けられるよう、全病室で差額ベッド代はいただいません。

●健診事業や、HPH（健康増進活動拠点病院）として、地域での医療講演や医療生協の班会などでの啓蒙を含めた保健予防活動にも、組合員や地域住民と協働しながら取り組んでいます。

●生活困難な方が経済的理由によって必要な医療を受ける機会が制限されることのないよう、無料低額診療事業を行っています。地域連携室では、無料低額診療事業のほか、医療・介護相談窓口として専任の社会福祉士が対応いたします。

●親切で安全かつ質の高い医療・福祉を提供し、地域医療に深く貢献することを目指しています。

*本誌掲載の情報は2025年12月時点のものです。
*最新の情報はホームページをご覧ください。
<http://kaseikyohp.jp>



rainbow

2025年12月25日発行
発行 | 総合病院 鹿児島生協病院
写真・編集・デザイン | 鹿児島生協病院広報委員会
〒891-0141 鹿児島県鹿児島市谷山中央5-20-10
代表TEL 099-267-1455